

Hizen Porcelain Found in Veracruz

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27285

ベラクルス出土の肥前磁器 Hizen Porcelain Found in Veracruz

野上 建紀 (有田町歴史民俗資料館)・

フディス エルナンデス アランダ (ベラクルス国立人類学歴史学研究所)

Nogami Takenori (Arita History and Folklore Museum),

Judith Hernández Aranda (Centro INAH-Veracruz)

I はじめに

新大陸で近世の肥前磁器の出土例が初めて確認されたのは、1970年代のことである。それは三杉隆敏氏が確認したもので、メキシコシティの地下鉄工事の際に出土した製品である(三杉 1986)。有田の内山地区で生産されたと推定される染付芙蓉手皿片4点である。当時はその輸入経路について、いくつかの推測が行われるものの、特定されることはなかった。江戸時代、ヨーロッパに大量の肥前磁器が輸出されていたことから、太平洋経由ではなく、大西洋経由で運ばれた可能性も考えられていた。

その一方、メキシコ側では早くからガレオン交易で日本磁器(肥前磁器)が運ばれていたと考えられていた。輸入経路について何か証拠があるわけではなかったが、東洋の陶磁器が運ばれるとしたら、太平洋を渡ってきたものと疑いをもつことなく、語られていた。日本の鎖国事情を含めた東アジアの情勢やヨーロッパへの肥前磁器の輸出入状況についての関心や知識が希薄であったがゆえに、逆にそうした知識が先入観とならずに輸入経路を考えることができたのであろう。しかしながら、メキシコ側においても日本磁器が明確に認識されていたわけではない。多くは中国磁器と混同されていた。特に考古資料においては、1970年代に確認されて以降は2006年まで新たに確認されたものはなかった。

日本でガレオン交易と肥前磁器の関係があまり議論されなかった理由は、いくつかあるが、考古学的にはガレオン交易のアジア側拠点であるマニラで肥前磁器の出土が確認されていなかったことが大きな理由である。そのため、2004年にマニラの出土遺物の中に肥前磁器が初めて確認されてからは、ガレオン交易と肥前磁器との関わりが積極的に議論されるようになった(野上 2005a)。筆者は肥前磁器の発



Figure 1 肥前地図



Figure 2 メキシコ地図

見後、フィリピン国立博物館と共同研究の覚書を交わし、2005年8月までに3度の出土遺物調査を行い、約70点の肥前磁器を確認した(野上 2005b、野上・Orogo・Cuevas・田中・洪 2005b)。その成果は2006年3月の第18回 IPPA (Indo-Pacific Prehistory Association・マニラ) で公表した(Nogami 2006)。続いて2006年よりメキシコシティから出土した陶磁器の調査を行い、以後、メキシコ国内で小片まで含めると200点ほどの肥前磁器片を確認している(野上・Terreros・Kuwayama・Barrera・Domínguez・田中 2006、野上 2010b)。そして、2009年7月に第53回 ICA (Congreso Internacional de Americanistas・メキシコシティ)、2010年2月に第20回九州近世陶磁学会(有田)でこれまでの調査研究成果を公表した(Nogami 2009、野上 2010a、オロゴ・ロンキリオ 2010、テロス 2010、田中 2010)。

今回は2010年秋に調査を行ったベラクルスの陶磁器調査で確認した肥前磁器を紹介する。

II ベラクルス出土の肥前磁器

ベラクルスは、メキシコ湾岸に位置する港町である(Fig.2)。スペイン植民地時代には大西洋岸側の貿易港として栄えた。その歴史は16世紀前半にさかのぼる。ベラクルスにあるサン・ファン・デ・ウルア島 San Juan de Ulúa に初めて、スペイン人の征服者ファ



Plate 1 サン・ファン・デ・ウルア要塞

ン・デ・グリハルバ Juan de Grijalva がやってきたのは1518年のことである。翌年にはエルナン・コレテスが上陸して、現在のベラクルスの地にメキシコ最初のスペイン植民都市を建設した。以後、メキシコとカリブ海諸島、あるいはスペイン本国との交易でにぎわう町となった。

2010年11月、筆者の一人の野上建紀はベラクルスの INAH (Instituto Nacional de Antropología e Historia) を訪れ、ベラクルス市内で出土した陶磁器調査を行った。市内にある収蔵庫には、出土遺物が、遺跡や種類毎に整理された状態で収蔵されている。そのため、磁器と分類された遺物を細分類することから始めることができた。そして、確認した肥前磁器の写真撮影およ

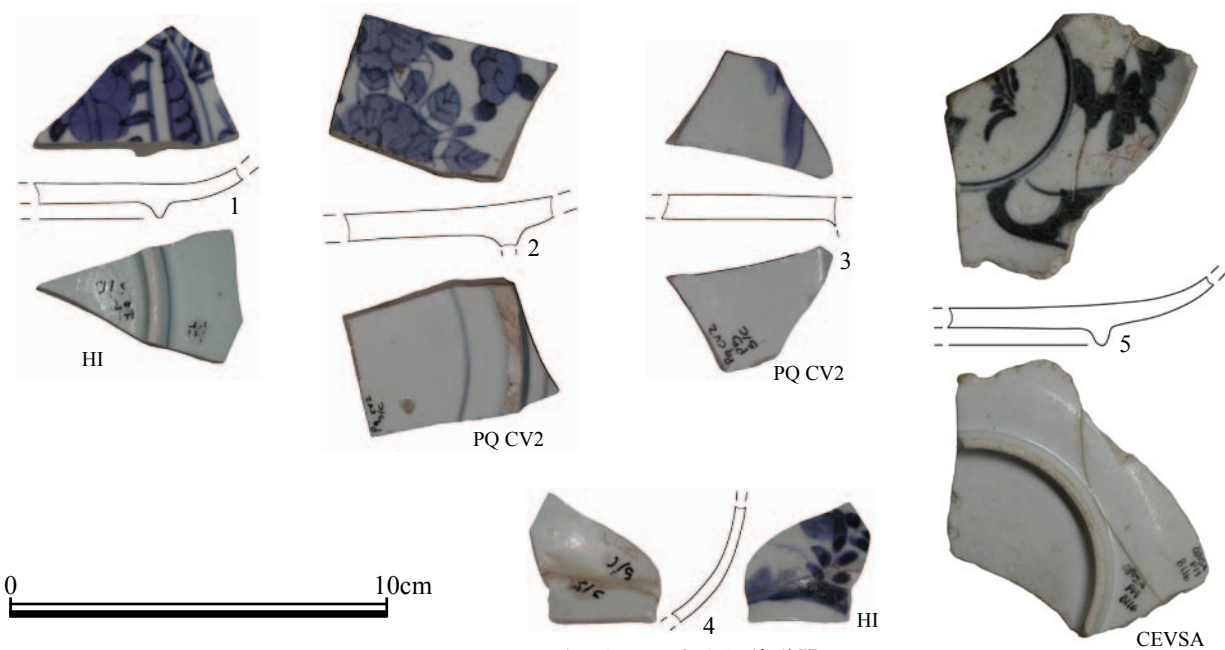


Figure 3 ベラクルス出土肥前磁器

び実測作業を行った (Figure 3)。いずれも有田製であり、特に内山地区の製品である可能性が高い。以下にそれらの製品の説明を行う。

Fig.3-1 は、Zocalo 付近の Hotel Imperial 地点で出土した染付芙蓉手皿である。花虫文と思われる。1660～1680 年代に有田内山で生産されたものである。長崎—台南—マニラなどガレオン交易に関わるルート上の遺跡、メキシコシティ、オアハカなどメキシコ国内の遺跡、グアテマラのアンティグアの遺跡で出土が見られるもので、太平洋を渡った肥前磁器の中で最も一般的な製品のひとつである。Fig.3-2 は Parque Ciriaco Vázquez で出土した染付皿である。Parque Ciriaco Vázquez は現在の INAH のオフィスの前に位置している。裏面にはハリ支え痕が残る。有田内山の製品で年代は 1655～1680 年代である。Fig.3-3 も Parque Ciriaco Vázquez で出土した染付皿である。山水文であろうか。17 世紀後半の有田産と思われる。Fig.3-4 は Hotel Imperial 地点で出土した染付碗である。底部に近い部分しか残らないが、チョコレートカップであろう。有田内山の製品で、生産年代は 1660～1680 年代である。チョコレートカップはラテンアメリカではメキシコシティ、オアハカ、アンティグア (グアテマラ)、ハバナ (キューバ) などで出土している。Fig.3-5 は市の中心街から少し離れた Cevsa (Monumento al Bombero から Av.lo de mayo をやや南東に進んだところ) から出土した金襴手の色絵カップアンドソーサーのソーサーである。1700～1740 年代、有田内山地区の窯場で焼かれ、赤絵町で上絵付けされたものであろう。金襴手のカップアンドソーサーは、メキシコシティ、オアハカなどで出土が見られるものの、マニラでは金襴手のカップアンドソーサーだけでなく、同年代の製品もまだ確認されていない。

Ⅲ 考察

(1) ベラクルス出土陶磁器の性格

ベラクルスはヌエバ・エスパニョーラとカリブ海の島々を結ぶ港であると同時にスペイン本国へ向けた出港地でもあった。もちろん逆にスペイン本国からの船が帰着する港でもある。すなわち、ベラクルスに持ち込まれた陶磁器は、性格的には主に三通り考えられる。一つ目はアカプルコに荷揚げされた陶磁器の中で、ベラクルスで消費するために持ち込まれたもの (ケース

1)、二つ目はベラクルスからカリブ海やスペインへ積み出すために持ち込まれたもの (ケース 2)、三つ目はヌエバ・エスパニョーラで消費するためにスペインから運び込まれたもの (ケース 3) である。今回、紹介した肥前磁器はいずれも港や倉庫といった流通に関わる施設から出土したものではないため、最終的にはベラクルスで消費されて廃棄されたものである可能性が高いが、ベラクルスを經由して運ばれるはずであったものが何らかの理由により、ベラクルスに残されることもあったろうし、もともとベラクルスに持ち込まれるまでは、ベラクルス用と分けられておらず、輸入された陶磁器の一部が残される形で、ベラクルスで消費されたものもあったであろう。

(2) ベラクルスへの流入経路

次に流入経路を合わせてみる。マニラからアカプルコを經由して陸路でベラクルスに運ばれたものはケース 1 と 2 が考えられ、大西洋を渡ってきたものはケース 3 と考えられる。マニラでも同様に発見されている Fig.3-1 のような 17 世紀後半の染付芙蓉手皿などの製品は、マニラからアカプルコを經由して運ばれてきた可能性が高い。そのため、性格的にはケース 1 か、ケース 2 である。一方、18 世紀前半の製品、すなわち、金襴手のカップアンドソーサーのソーサーについては、その流入経路がまだ明らかではない。ガレオン船が運んだ肥前磁器について、マニラへの輸入の担い手が中国船であったことはこれまでも指摘してきたところである。それは考古資料においても文献史料においても確認することができる (野上 2005b,c, 野上・李・盧・洪 2005a, 方 2003)。しかし、そのことが確認できるのは今のところ、17 世紀後半に限られている。17 世紀末の展海令によって、清が本格的に海外輸出を再開した後となる 18 世紀以降に中国船がマニラに肥前磁器を運んだ直接的な記録は見当たらない。また、考古資料においてもまだマニラでは 18 世紀前半の肥前磁器は確認されていない。さらに 18 世紀前半に肥前で金襴手の色絵カップアンドソーサーが大量に生産され、ヨーロッパに輸出されていることは、生産地 (有田) や消費地 (アムステルダム) などの発掘調査例でも確認することができる。そのため、ヨーロッパに運ばれたものが大西洋を渡ってメキシコに運ばれた可能性も考えられるのである。すなわち、ケース 3 である

可能性をもつ。

もっとも今後、マニラで出土例が発見される可能性も高いと思う。筆者らがマニラで調査を行った出土陶磁器はまだ全体の中ではごく一部にとどまっております、ようやく概観するに至っただけであるからである。また、年代が限定されるが、中国船が18世紀前半に肥前磁器を扱った時期がある。1717～1723年に清が再び海禁を行った際に中国船が大量の「受皿付茶碗」thee goetを長崎からマカオ・広東へ積み出した記録が残る。メキシコシティ、オアハカ、ベラクルスなどで出土しているカップアンドソーサーの中には、マカオ・広東に中国船が輸出されたものも含まれているかもしれない。

また、メキシコで18世紀前半の金襴手の肥前磁器が確認されているのは、ベラクルスだけではない。メキシコシティ、オアハカでも出土しているし、メキシコ国内に伝世品も残されている。これら18世紀前半の製品の輸入経路を知る上でも、ベラクルスの出土状況は今後注目される。言うまでもなくヨーロッパからメキシコへ運ばれてくる場合、その荷揚げ地はベラクルスと考えられるからである。

(3) ベラクルスを起点とした陶磁器流通

太平洋側にあるアカプルコではまだ確認されていないが、その多くがマニラでガレオン船に積まれて、アカプルコに荷揚げされたものがラテンアメリカ各地に流通したものであることは確かであろう。その流通範囲はメキシコ中央部のメキシコシティ、オアハカの諸都市をはじめ、南はグアテマラのアンティグアにも及んでいる。さらに伝世品の存在からペルーなどの南米にも広がりを見せる可能性もある。そして、メキシコから東方については、カリブ海のハバナ、さらには大西洋を隔てたスペインのカディスにまで広がっている。ベラクルスの出土資料は、特にメキシコから東方の地域への流通を知る上で重要である。今回は数片の発見にとどまったが、今後の調査資料の蓄積を待ちたい。

この研究は、2010年度西田記念東洋陶磁史研究助成(研究テーマ「アメリカ大陸における東洋陶磁の受容と技術交流」)、2010年度鍋島報効会研究所(肥前磁器の海上交易ネットワークの研究)を受けて行ったものである。

参考文献

- アルフレッド・B・オロゴ、ウィルフレッド・P・ロンキリオ
2010「イントラムロス・マニラの古い城壁で囲まれた都市と初期の磁器貿易」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会20周年記念国際シンポジウム p96-103
- エラディオ・テロス・エスピノサ 2010「メキシコシティ中央歴史地区から出土した東洋磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会20周年記念国際シンポジウム p284-292
- 田中和彦 2010「メキシコ出土の肥前磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会20周年記念国際シンポジウム p293-301
- 野上建紀 2005a「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』48号 p1-5
- 野上建紀 2005b「ガレオン貿易と肥前磁器—マニラ周辺海域に展開した唐船の活動とともに」、『上智アジア学』第23号 p239-260
- 野上建紀 2005c「澳門出土の肥前磁器」『金大考古』50号 p7-11
- 野上建紀・李匡梯・盧泰康・洪曉純 2005a「台南出土の肥前磁器—17世紀における海上交易に関する考察—」『金大考古』No. 48 p6-10
- 野上建紀・Alfredo B.Orogo・Nida T.Cuevas・田中和彦・洪曉純 2005b「ガレオン船で運ばれた肥前磁器」『水中考古学研究』創刊号 p104-115
- 野上建紀・Eladio Terreros・George Kuwayama・José Álvaro Barrera・Alicia Islas Domínguez・田中和彦 2006「太平洋を渡った陶磁器—メキシコ発見肥前磁器を中心に」『水中考古学研究』第2号 p88-105
- 野上建紀 2010a「太平洋を渡った肥前磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁学会20周年記念国際シンポジウム p30-40
- 野上建紀 2010b「一七世紀後半～一八世紀前半における肥前磁器のアメリカ大陸への流通」『交通史研究』第72号 p1-23
- 方真真 2003「明鄭時代台湾與菲律賓的貿易關係—以馬尼拉海關紀錄為中心」『台湾文獻』第54卷第3期 p59-105。
- 三杉隆敏 1986『世界の染付6』同朋社
- Nogami, Takenori 2006. On Hizen Ware and the Manila-Acapulco Galleon Trade. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* volume 26, p124-130.
- Nogami, Takenori 2009. Hizen Porcelain and the Manila-Acapulco Galleon Trade. *53 Congreso Internacional de Americanistas*.